

優秀修士論文概要

ジンメルと「形而上学的憧憬」の問題

植 島 幹 登

本稿は、ゲオルク・ジンメル (Georg Simmel) の思索の全体像を「形而上学的憧憬」(eine metaphysische Sehnsucht) という概念を軸に捉える試みである。

ジンメルの思索は、その全体像が捉え難いという問題を含んでいる。というのも、彼が生涯において論じたテーマは実に多様であり、かつそれらのテーマがなんらかの原理によって体系づけられるのではなく気ままにあちらこちらへと飛散していくかのような体を成しているからである。本稿ではこの問題の解決に向け、ジンメルが自らの生涯を振り返った手記に登場する「形而上学的憧憬」という概念を採り上げ、〈この概念を原理としてジンメルの思索全体が駆動していた〉という仮説を検証した。

第一章で検討したのは、件の手記「1916年、もし総括するならば」の内容である。ここでは、ジンメルが「精神の発展に寄与してきた」ところの「主題 (Motiv)」が「独自の根本主題」、「機能的な主題」、「いくつかの些細なもの」の三つに分類されて提示される。このうち「機能的な主題」はさらに、「部分と全体」、「表層と深淵」、「実在性と理念」の三つの二元論的な探求に分類される。これらの二元論的な探求は、先行研究においてジンメルの思索の形式的な特徴とされてきたものである。この手記ではさらに、これらの「機能的な主題」がいずれも「ひとつの形而上学的憧憬から生じてきたものである」と述べられる。このことから、ジンメルの思索の全体は「ひとつの形而上学的憧憬」を原理として駆動していた、という仮説が立てられる。ただし、ここではこの「形而上学的憧憬」が何に対する憧憬なのか明示されていない。

第二章では、件の手記で「形而上学的憧憬」から生じてきたとされていた「機能的な主題」を受け、ジンメルが哲学において「機能 (Funktion)」を重視していたことを示した。ジンメルは『哲学の主要問題』と『哲学的文化』という二つの著作において、哲学の本質を思考の「機能」に置くことを提案している。「機能」とは、そこにどのような内容が入ろうとも一定の結果が得られるような、いわば関数である。それゆえ、思考の「機能」といった時それに対置されるものは、思考において取り組む対象と、思考の末に導き出された成果との二つに分けられる。これら双方に対して思考の「機能」に哲学の重点を置くことでジンメルは、一方で哲学の対象を抽象的な概念から解放してあらゆる事物へと拓くことを、他方で哲学の成果が何らかの体系として実を結ばなければならないという呪縛から哲学を解放することを企図していた。ジンメルはこれを「教説としての形而上学からいわば生ないし機能としての形而上学への原理的転換」と表現している。したがって、件の手記で「形而上学的憧憬」から生じてきたとされていた「機能的な主題」は、ジンメルがそこに哲学の本質を置こうとしたところのものであり、それが「ひとつの形而上学的憧憬」から生じているならば、この憧憬がジンメルの哲学全体を駆動していたといえる。

第三章では、ジンメルが「哲学とは何か」ということに言及している箇所を検討することで、件の「形

而上学的憧憬」が「存在の全体性」への憧憬であるとする解釈を示した。第二章で論じたように、哲学には内容面での統一性がなく、ただ思考の機能にのみ統一性が認められるというのがジンメルの哲学観であった。しかし『哲学の主要問題』第一章「哲学の本質」では、さらに「存在の全体性 (die Totalität des Seins)」が哲学の形式的な条件として措定される。ここでの「存在の全体性」とはこの世界にありうるすべての事物と人生において起こるすべての局面の全体である。しかし、空間的・時間的に制限された人間にはこうした「存在の全体性」を直接に捉えることは不可能である。それゆえ哲学は、与えられた諸断片から全体を仕立て上げるという仕方です行われなければならない。ここに哲学的な思考の成果の一面性が帰結する。すなわち、哲学は「存在の全体性」を捉えるものであるが、そこで捉えられた全体は断片から仕立て上げられたものであるがゆえに、「存在の全体性」の一面を捉えたものに過ぎないということが帰結する。以上の論を踏まえると、ジンメルにとって哲学とは「存在の全体性」を捉えんとする営みであるから、件の手記における「形而上学的憧憬」は「存在の全体性」への「憧憬」であると解釈することができる。ただしその場合、この「存在の全体性」は一面性という制約を受けるがゆえに、「形而上学的憧憬」もそれが完全に満たされることはないものと考えなければならない。それゆえ、この「形而上学的憧憬」は哲学的な思考を駆動する原理ではあるが、しかし決して完全には実を結ぶことのない統制的なものであると解釈される。

第四章では、「形而上学的憧憬」を原理とする思索が、決して完全には実を結ぶことがないとしてもなお意味をもつことを、ジンメルの「哲学的文化」という概念に基づいて示した。というのも、ジンメルがこの概念でもって哲学を文化の下に包摂していることによって、この憧憬が実を結ばなくとも哲学は魂の発展として意味をもつからである。ジンメルは文化を「主観的文化」と「客観的文化」という二側面において捉える。「主観的文化」とはいわば、個人の魂が自らを高めていく発展の過程であり、「客観的文化」とは、個人が発展するに際して取り組む事物やその結果として生み出された形成物である。ジンメルは「文化」を自然から区別された目的論的な過程として捉えている。それゆえ、本来的に目的をもった個人の発展としての「主観的文化」が第一義のものとされ、「客観的文化」は個人が発展するに際して必要とする客観の発展として第二義のものとされる。

ジンメルはこうした文化の二面性から文化の悲劇性を語っている。ここでの「悲劇 (Tragödie)」とは、先にみた「客観的文化」が「主観的文化」から離れ、もはや主観の魂に還帰されないまま空転するという事態である。個人の発展である「主観的文化」は、その進行に際して自らの外部にあるものを取り込み形成することを必要とする。ところがこうして形成されたものは、なんらかの「客観的な内容」をもつものとして、「人間の魂の人格の発展に適合できる方向から逸れていってしまうという宿命」をもつ。こうした宿命をもった形成物の蓄積である「客観的文化」は、「主観的文化」の発展とは無関係な「固有の論理」をもって進行し、今度は「主観的文化」がこの「固有の論理」に従わなければならないという主従の逆転が生じる。こうした「主観的文化」と「客観的文化」との逆転が、ジンメルの捉えた文化の悲劇性である。

「哲学的文化」という概念でもって「哲学」が「文化」の下に包摂されている以上、哲学もこうした文化の悲劇性を伴っている。ジンメルは哲学における客観的文化の空転を「教説の党派形成」の進行として捉えていた。すなわち、哲学における思考の成果が「固有の論理」をもって進行し、主観的な思考がこれに従わなければならないという事態である。それゆえ本稿第二章でみたように哲学の本質を思考の成果ではなく機能に置いていたことは、この文化としての哲学の悲劇性への抵抗を示していたと捉え

ジンメルと「形而上学的憧憬」の問題

ることができるだろう。こうした抵抗を实践した著作『哲学的文化』の序文ではしかし、「哲学的文化」を統一するものとして、こうした「機能」に依拠する「機能的統一性」のほかにもう一つ「目的論的統一性」があることが示される。「機能的統一性」は多様な内容をもったもろもろの哲学的な営みを統一するものであり、「目的論的統一性」は哲学を文化一般として統一するものである。先にみたように、ジンメルは文化を個人の魂が自らを高めていくという目的論的な発展過程として捉えていた。それゆえこの「目的論的統一性」とは、人間の魂の目的論に内包されている目標によって支えられた統一性にほかならない。

「哲学的文化」がもつこうした「目的論的統一性」によって、本稿第三章で明らかになった「形而上学的憧憬」の意義がふたたび際立つこととなる。本稿第三章では、件の手記における「形而上学的憧憬」が「存在の全体性」への「憧憬」であることが明らかになると同時に、「存在の全体性」はなんらかの一面的な概念を際立たせることによって言表されるものであるがゆえに、この「形而上学的憧憬」はなんらかの成果として最終的に実を結んではならず、あくまで統制的な役割をもつものであるということも明らかになった。しかしいまや、哲学的な思考は主観の魂の発展を目指す「哲学的文化」であるのだから、「形而上学的憧憬」はたんなる「憧憬」として統制的にはたらくことによって、この主観の魂の発展に寄与するものとして解釈することができる。

以上の考察を経て本稿で明らかとなったのは、件の手記で語られる「形而上学的憧憬」が「存在の全体性」への「憧憬」であり、また、主観の魂の発展としての「哲学的文化」を駆動するための統制的役割を担うものであるということである。このことでもってジンメルの思索の全体像を次のように捉えることができるだろう。ジンメルは自らの「形而上学的憧憬」に基づいて「存在の全体性」を捉えようとしていた。しかしその「存在の全体性」は常に一面的にしか捉えられないと考えていたため、一つの視点に拘泥するのではなく、次々と視点を変えながら「存在の全体性」にアプローチする道を選んだ。この道は決してけっして「存在の全体性」を十全に捉えることには通じていないが、しかしジンメルはこの道が主観の魂の発展には通じていると考えていた、と。